

三国志

英雄ここにあり_(中)

日鍊三郎

講談社版

三国志 英雄ここにあり (中)

© Renzaburō Shibata

560円

昭和43年12月12日 第1刷発行

昭和48年5月12日 第4刷発行

著 者 柴 田 鍊 三 郎

発 行 者 野 間 省 一

発 行 所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(945)1111(大代表)

振 替 東 京 3 9 3 0

印 刷 所 豊 国 印 刷 株 式 会 社

製 本 所 株 式 会 社 国 宝 社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan

0093-147526-2253 (1) (文2)

目次

老	策	士	七
梟	雄	兵	一四
臥	竜、動か	ず	二〇
眼	球をくら	う	二六
妻	の	肉	三三
呂	布	悲	三九
密	勅		四五
酒ヲ煮テ、英雄ヲ論ズ			五一
決	戦	の	五七
智	将	張	六三
敗	走	譜	七一
関	羽	孤	七八
死	生	命	八四

疾風白馬野	九〇
主従求心	九七
飛鳥、跡を濁さず	一〇三
関羽、千里を行く	一〇九
血煙り偃月刀	一一五
汝 南 へ	一二二
山城の猛虎	一二八
再 会	一三五
小霸王最期	一四一
決戦の秋至る	一四八
裏切り者	一五四
背水の陣	一六〇
敗走將軍	一六六
袁氏滅亡	一七二

火	退	焼	信	公	出	三	雪	臥	惜	八	野	水	新
攻			頼	子		顧				門		鏡	
水	路	殺	と	危		の	問	竜	別	金			
攻	策	陣	惑	機	廬	礼	行	岡	行	鎖	陣	賢	野

二五九	二五三	二四七	二四一	二三五	二二九	二二二	二一六	二一〇	二〇四	一九七	一九一	一八五	一七八
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

死	虚	令	周	決	孫	謀	孔	軍	燕	趙	母
地			瑜	戦	權	士	明	師	人	雲	子
の	実	下	激	か	立	舌	決	予		奮	非
眼	策	る	怒	降	腹	戦	意	言	橋	戦	命
光				服							

三三二	三二六	三二〇	三一四	三〇八	三〇三	二九七	二九一	二八五	二七九	二七二	二六六
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

三国志

英雄ここにあり

(中)

装幀・さしえ 山崎百々雄

老 策 士

一

盛夏の午さがり——。野には、灼りつける陽光が満ちて、人影も払っている。

樹木も草も、午睡をむさぼっているような静けさが、つづいている。

ここ——陳家の館の、奥庭にひらいた南窓に倚って、主人もまた、うつらうつらとしていた。

あるかないかの微風が、老夫の白髪をそよがせて、その午睡を包んでいる。

陳珪老人は、この十日あまり、書屋にとじこもって、一步も外へ出ずに、こうして、のんびりとすごしているのであった。

やがて——。

馬蹄のひびきが、せわしく、近づいて来た。

陳珪老人は、その音に、薄目をひらいたが、気にもとめずに、また、目蓋をふさいだ。

「父上——」

奥庭を横切つて来た跽音が、南窓の前で停つた。

老人は、かるいあくびをしてから、窓の外へ、視線を送つた。

このたび、曹操の推轂によって広陵の太守になった陳登の、異常に緊迫した表情が、そこにあった。

「どうしたな？」

陳珪は、視かえした。

「袁術がいよいよ、この徐州を征すべく、二十余万の大軍を起しました。急報によれば、二十余万は七路にわかれ、第一路軍を率いる張勳を総帥として、第二路は上将橋蕤、第三路は上将陳紀、第四路は副将雷薄、第五路は副将陳蘭が率い、これに加えて、降将の韓暹と楊奉が、第六路と第七路を受け持ち、袁術自身は、そのあとから三万を率いて、進撃して来るとのこと——」

「ほう、そうかね」

陳珪は、その報せにも、さしておどろかぬのんびりとした態度を示している。

「父上、どうなさる？ このまま、この館にとどまってい

ることは、叶いますまい」

「そうさの」

「わたしは、おそれるのは、謀士陳宮の肚のうちです。呂布は、いざ来れ、とばかり武者顔いして居りましようが、陳宮の方は、袁術と決戦して勝利ののぞみはないと考えるに相違ありません。この戦いをさけるためには、父上とわたしをひとつらえて、袁術の許へ送りとどけて、その激怒をしずめよう、と陳宮が考えるのは、火を見るより明白です。愚図々々していては、われら父子の首は刎ねられてしまいます」

「ははは……、お前のあわてかたは、いささかおそすぎたな」

「どうしてです？」

「いま頃になって、遁走しようと思っても、もう、間に合わぬよ」

「わたしは、まだ、おそくはないと存じますが――」

「耳をすますがよいぞ、息子！」

老人は、云った。

そう云われて、陳登は、はつとなった。

大地を搏つ一隊の軍馬の音が、つたわって来た。

「父上！」

陳登は、血相を変えた。

「おちつけ、息子。この老夫に、思案がある」

陳珪は、悠然としていた。

それから、二刻ののち、陳珪・陳登父子は、呂布の面前にひき据えられていた。

「陳大夫父子！ これを見よ！」

呂布は、絵図面をかがけてみせた。

それは地を掩うて寄せて来る袁術軍の進攻図であった。第一路軍は徐州へ、第二路軍は小沛へ、第三路軍は沂都へ、第四路軍は瑯琊へ、第五路軍は碭石へ、第六路軍は下邳へ、第七路軍は浚山へ、ひしひしと迫って来ている。

「この一大事を、お主ら父子はなんと見る？ 禍をまねいたのは、陳大夫父子、お主らだぞ。……わしの娘を所望して、袁術が遣して来た韓胤を捕虜としたのは、陳大夫、お主だ。そして、その捕虜をひきつれて、許昌へ上り、曹操に、首を刎ねさせたのは、陳登、お主だ。お主ら父子は、曹操に媚びて、爵禄を得んために、かかる一大事をまねくおそれも思わずに、あさはかにも、韓胤を殺したのだ。……この罪を、どうつぐなうか！」

呂布は、炎を吐かんばかりの炬眼で、睨みつけた。

陳珪老人は、しかし、平然と微笑して、

「將軍は、この禍を除くために、われら父子の首級を刎ねて、袁術に献ぜん、と申されるか？」

「それ以外に方法があるか！」

「いかにも、ご尤もお考えではある。……しかし、温侯



ともあろう天下ならびもなき勇猛の將軍が、なんとまあ、あわれにも、女子にも劣る懦弱ぶりを示されることか」

そう云って、陳珪老人は、からからと高笑った。

「なんだと！」

呂布は顔面を朱にした。

陳珪老人は、笑いを納めると、鋭く呂布を視かえした。

「それがし、その図面を拝見いたすに、七路の兵は、申そうなら、七堆の腐草でござる。なんぞ、意に介することあらんや」

「ほざくな！ 生命惜しさに、佞奸の弁を弄せんとして、も、たばかられはせぬぞ！」

呂布は、呶号した。

その時、謀士陳宮が、呂布のそばへ、すっと、寄って、耳うちした。

呂布は、「うむ」と頷くと、

「陳大夫——。大言をうそぶくからには、お主自身に、袁術二十余万の軍を破る計でもあると申すか？ もし、あらば、申してみよ。死罪は免じてつかわす」

と、云った。

陳珪老人は、再び微笑して、

「俾の脳中に、徐州をして難を脱れせしむる計が成って居り申す」

と、こたえた。

「よし、陳登、申してみよ」

「されば——」

陳登は、口をひらいた。

二

「袁術が率いる兵は、二十余万ときけば、いかにも、地を掩うて来る雲霞の巨勢に相違ござらぬ。しかし、これらの大半は、烏合の衆であり、このうち、袁術のために死なんと忠誠を誓った兵が、一万も居るかどうか、疑わしゅう存ずる。わが徐州軍が、正兵を以て之を守り、奇兵を以て之を討つならば、敵をしりぞけることは必ずしも難事ではありますまい。……なお、將軍が、そのことに不安をおぼえられるならば、巧妙の計略がひとつ——」

「それは——？」

「左様——、第七路を率いる楊奉は、天子を擁して、長安を脱出し、鳳輦を、旧都洛陽へ還すのに、大功があったにも拘らず、曹操に追われて、やむなく袁術をたよった武將でござる。きき及ぶに、袁術は、敗走して来た楊奉を、輕んじて、帷幕中の末席を与えて居る由。楊奉ほどの世にきこえた武將が、どうして、その地位にあまんじて居るものぞ、と推測され申す。そこで、ひそかに、密書を送って、楊奉を説き伏せて、こちらへ内応せしめ、さらに、劉備玄德に乞うて、旧怨を水に流して、味方についてもらい、三

方より一挙に、攻めかかれれば、袁術を擒とらへすること、さまでの難事にはあらず、と存じますが、如何？」

「うむ！」

呂布は、唸うなった。その計の見事さに感服させられたのである。

しかし、かたわらに立つ陳宮は、なお疑惑の色を、双眸から消さずに、陳登を、じっと見成みなりっていたが、

「では、楊奉を説く密使の役を、其計が、つとめられるか？」

と、云った。

陳登は、ためらわず、

「承知いたしました」

と、受諾してみせた。

即日――。

陳登は浚山へ向って出発して行つた。また、別の使者が、予州に在る劉備玄徳の許へ趨はしつた。

袁術七路の軍勢と、呂布の率いる徐州軍が、激突したのは、それから二日後の味爽であつた。

小沛に進んで来た第二路軍には、高順が向つた。

沂都に進んで来た第三路軍には、陳宮が向つた。

鄆郷へ進んで来た第四路軍には、張遼が向つた。

碭石へ進んで来た第五路軍には、宗憲・魏統が向つた。

なお、下邳へ進んで来た第六路軍の大將韓暹は、楊奉と同じく、天子が洛陽還幸の際、大いに働いた旧臣の一人であつたが、前身が陝西の山寨に拠っていた山賊の頭領であつたため、曹操に追いはられた人物であつた。そこで、陳登は、楊奉を説くにあたつて、韓暹もまた味方にひき入れてみせる、と約束していたので、呂布はそれに向つて、部将を送らなかつた。

呂布自身は、大道を進んで来る総帥張勳に向つて、兵を進めた。

まだ明けやらぬ野に、名馬赤兔馬にうちまたがつた呂布は、毅然と胸をはって、待った。

晴れわたつた天から、星かげが、ひとつ、ひとつ、消えてゆく――。

地上に黒く動かぬ兵は、しわぶきひとつもらさず、肅としてしずまりかえていた。

と――。

遠く、敵の陣営から、遠雷のような轟音が起つた。とみるうちに、無数の火の玉が、中天めがけて噴きあがつた。

楊奉と韓暹の兵が、味方の陣営めがけて、火を放つたのである。

それが、合図であつた。

「突撃っ！」

呂布は、天を裂くばかりの号令を下しざま、名馬へ、一

鞭くれて、まっしぐらに疾駆した。

三

嗷号と悲鳴と。

戟と槍と。

人と馬と。

しらしら明けの徐州の野は、一瞬にして、凄じい修羅場と化した。

呂布軍は、味方の裏切りに遭うて陣形を乱した寄手の中軍の、まったく中へ、突入したのである。

第二路から第五路までの淮南勢は、呂布麾下の猛将たちと闘っているため、本営の收拾すべからざる混乱状態を知っても、救援の余裕はなかった。

久しぶりに、呂布の豪勇ぶりが、遺憾なく發揮された激闘であった。

疾風が枯葉を卷く勢いで、人馬を、その方天戟の賛に、血飛沫を新戦場に撒きつつ、袁術の本営めざして、赤兎馬をとばす姿は、魔神に等しかった。

中軍の前衛は、紀靈が指揮にあたっていたが、呂布の突撃をくらうや、ひとたまりもなく敗れ去って、その前方を空けてしまった。

やがて、小高い丘陵の麓に達した呂布は、その中腹に、朝陽をあびて、かがやく竜鳳日月の旗幟、金瓜銀斧、黄鉞

白旄、黄羅の銷金した傘蓋をみとめた。

「おうっ！ 袁術はそこか！」

馬腹を蹴って、馳せ上って行くや、傘蓋の下に、黄金の甲に身がためして、傲然と佇立する人物が、見わけられた。

袁術であった。

声のとどく距離に、赤兎馬が入るや、袁術は、口をひらいた。

「主に背いた家奴め、降らざや！」

「ほざくな、僭上のくそ豚め！」

一気に躍り込もうとする呂布めがけて、大将李豊が、長槍をくり出して来た。

呂布は、小うるさげに、方天戟を、一閃させた。

「あっ」

李豊は、槍の柄もろとも右手を脇から両断されて、大きなけぞって、宙を舞い落ちてしまった。

「袁術っ！ 一騎討ちの勇氣はないか！」

叫ぶ呂布に向って、袁術麾下の将士が、われこそ手柄にせんと殺到して来た。

しかし、方天戟が喰るたびに、自らそれを望むがごとく、次つぎに、かれらの首は飛び、胴は断たれ、手足は血の尾をひいて、地面へ落ちた。

呂布が赤兎馬を躍らせて行くところ、敵勢の馬匹衣甲

は、ことごとく血汐にまみれた。

流石の袁術も、ききしにまさる呂布の魔神かと目を疑うほどの強さに、身を顛わせて、馬首をめぐらすや、遁走しないわけにはいかなかった。

その丘陵を奔り越えて、ほっと一息ついたとたん――。

行手に一彪の漆黒の軍勢が、忽然と出現した。

その先頭をきって疾駆して来る一将の、朝風にひるがえる長髯は、劉備玄德の股肱として天下にその名をひろめた関羽雲長のものにまぎれもなかった。

「あっ！ いかん！」

影の形に添うように、袁術の身の守護に任じていた催進使の楽就が、驚愕の叫びを發し、

「陛下、あれは、呂布にまさる万夫不当の豪雄であります！ 東へ、遁れられませい！」

と、云いのこすや、自らを犠牲にして、関羽めがけて、まっしぐらに、突撃して行った。

楽就が、身をすてて、関羽と闘うすきに、袁術は、辛うじて、野を掠めて、遁れ去ることを得た。

袁術を生捕りにすることこそ叶わなかったが、呂布にとって、これほどの小気味よい勝利は、はじめてであった。

呂布は、戦功第一の楊奉・韓暹を、徐州城内に招いて、盛大な祝賀の宴を催した。

ただ、呂布にとって、いささか氣に食わなかったのは、旧怨をすてて、劉備玄德が送ってくれた関羽雲長が、袁術遁走を見とどけておいて、そのまま、馬首をめぐらして、さっさと、予州へひきあげてしまったことであつた。

「関羽め、一言の祝辞も述べずに、姿を消すとは！」

呂布は、むかつとしたが、それも一瞬のことで、勝利の酔いは巨軀をめぐつて、われを忘れるくらいであつた。

楊奉をして瑯琊の牧に、韓暹をして沂都の牧に任じた呂布は、諸將に向つて、この二人を、徐州城にとどめて、股肱にすべきや否やを問うた。

すると、陳珪老人が、

「韓・楊両將が、往つて山東に拠るならば、一年を出ないうちに、山東の城郭は、おのずから、將軍に帰属いたしましう」と、進言した。

呂布は「いかにも――」と、うなずいて、二人を、瑯琊・沂都の二処へ、おもむかせた。

その夜、陳登が、父に、ひそかに問うた。

「楊奉と韓暹を、徐州にとどめておいて、呂布を討つ際の、謀の根にした方が、よろしかったと考えますが……？」

「いや――」

陳珪は、かぶりを振った。

「あの二人を、そばに置けば、虎に爪牙を添えるようなも

のじゃ。なるべく、遠くへ、はなしておくにかぎる」

陳珪父子は、呂布を討つ計画を、ひそかに、めぐらしていたのである。

梟雄兵法

一

辺土もあまさず、天下の地をことごとく、わが手中に、つかんでみせる！

漢朝の丞相となった曹操の脳裡には、その雄大な壮図が、ひろげられていた。

それには、まず、袁術を打ち滅して、南陽を取らねばならなかった。

折から――。

江東の小覇郎・孫策から、密書がとどいた。

袁術は、呂布に一敗を喫して、淮南に逃げかえるや、直ちに、江東へ使者を遣して、孫策に、精銳三万を送って我を援助せよ、と申し入れたのであった。孫策を養育してや

った恩を、返させようとしたのである。孫策は、逆に、

『帝号を僭称して、漢室に背いた罪は、軽からず。叛賊となったおん身を援ける意志は、さらさらなし。おん身ごとき大逆不道の者に、玉璽を預けておくことは、漢室歴代の帝の璽に対して申しわけなく存ずるゆえ、早々に返却されるべし』

と、返書したのであった。

当然、袁術は、

「黄口の孺子め！ 何を、ほざく！」

と、烈火の憤りを発して、江東を攻める用意をはじめたのである。

孫策としては、覚悟をきめていたものの、これを好機として、袁術を滅すべく、曹操の援助を乞うたのであった。

「よし、まさに、好機だ！」

曹操は、莞爾とした。

袁術を伐つに、将の顔ぶれは、そろった。

呂布、劉備玄徳、それに孫策を加えることができるのであった。

建安二年夏――。

曹操は、呂布と劉備玄徳に向って、全兵を興して、贗天子討伐の壮挙に加わるべし、と命じ、また、孫策に対しては、会稽の太守の印綬を与えて、江口より攻め入るべし、と通達しておいて、自らは、馬歩兵十七万を率いて、許都を進發した。